

花散里卷私論

西木忠一

一

葵卷は光源氏二十二歳の春から語り出される。

世の中変りて後、よろづものうく思され、御身のやむごとなきも添ふにや、軽々しき御忍び歩きもつつましうて、こどもかしくも、おぼつかなきの嘆きを重ねたまふ報いにや、なほ我にっれなき人の御心を尽きせずのみ思し嘆く。(注)

とあり、既に前年桐壺帝の讓位がなされており、世の権勢地図は徐々に塗り変えられている。光源氏は今「右大将」に昇進して、輕挙も採れずに多くの通い所の「嘆き」が重なるせいか、「我にっれなき人の御心」を「思し嘆く」のであったという。かくして彼の前途に暗雲の兆しが見えはじめるのであった。

病いがちであった桐壺院の病状が改まったのは光源氏二十三歳の

十月(物語は賢木卷)であった。東宮が光源氏の胤であるという秘事を勤付していたか否かは別問題として、院は死を前にして「春宮の御ことを、かへすがへす」も朱雀帝に依頼・遺言した。

桐壺院の傍には常に藤壺中宮が控えているので、弘徽殿太后がそのことに拘泥し見舞を躊躇するうちに、桐壺院は「おどろおどろしきさまにもおはしまさで」崩御してしまった。この時点から政界は益々大きく回転しはじめた。

光源氏は諒闇の新年を「ものうくて籠りるたまへ」るのであった。だから春の具召には右大臣側が思い通りの権勢を振う有様である。自棄的になった光源氏は藤壺中宮に迫ったが、結果、藤壺中宮は出家を果たす。それは桐壺院一周忌の中宮の法華八講果ての日であった。

年明けての夏、病いによって退下した臈月夜尚侍と光源氏は密会し、果ては右大臣によって発覚という仕儀となる。

すべては桐壺院崩御による右大臣側の圧迫に抗するかに見えるものの、結果はおのが身を自縄自縛に追い込むものであった。

そうした時、光源氏の念頭にふと浮んだのが桐壺院後宮の麗景殿女御の「御妹の三の君」だったわけである。

光源氏の周辺から去って行った女性達に、伊勢下向を敢行した六条御息所・光源氏の手から逃避する最後の方途として出家を選んだ藤壺中宮・危険な逢瀬を持って仲を離れた臙月夜尚侍などがいたが、そうした女性達とは大きく異なる女性が花散里だった。物語では「このごろ残ることなく思ひ乱る世のあはれのくさはひには思ひ出でたまふ」と語られていて、彼自身物思いの中にあつたが、そんな時に特に相応しい女性が花散里だったわけである。

光源氏が桐壺院在位時代を懐古するには藤壺を訪れるのが最善であろうが、出家されてしまった今では彼の満足度は大きく差引かれ、右大臣側の目も斟酌されねばならない。また、弘徽殿太后を尋ねる筈もなく、となれば麗景殿女御あたりを尋ねるのが、現時点の光源氏の心をより沈静化させるに相応しく、かつ「光源氏とかりそめの逢瀬をもつたにも拘らず、その後中途半端にさしおかれ、煩悶を重ねる女性」であった彼女の、「境遇や心意にみずからすがたを見いだした」^(注2)からであろう。

二 外 婚 里 卷 末

作者は賢木卷末で臙月夜尚侍に接近した光源氏に対して、

いとどいみじうめざましく、このついでに、さるべき事ども構へ出でむに、よき便りなり、と思しめぐらすべし。

と誓う弘徽殿太后を語った。それを受けて須磨卷冒頭で

世の中いとわづらはしく、はしたなきことのみまされば、せめて知らず顔にあり経ても、これよりまさることもやと思しなりぬ。

と光源氏の思い至るのを語る。その間に存在するのが花散里巻である。賢木須磨阿卷が光源氏の凶運を讀者に予感させながら、その中間に両巻とは関連の薄い優艶な世界を展開した。そして登場する女性はあるの軽佻ともいえる臙月夜尚侍とは正反対の、花散里という女性だったのである。しかし、花散里巻冒頭は、

人知れぬ御心づからのもの思はしきは何時となきことなめれど、かくおほかたの世につけてさへわづらはしう、思し乱るることのみまされば、もの心細く、世の中なべて厭はしう思しならるるに、さすがなること多かり。

と語り出され、内容的には賢木卷末を受けていることは、すでに三谷邦明氏も述べられたところである。

ここで花散里巻の構成を見ることにする。

- (1) 序
- (2) 中川の女との歌の贈答
- (3) 麗景殿女御との歌の贈答
- (4) 三の君との対面

の四段構成と見ることが出来よう。しかし、

前段——(1)・(2)

後段——(3)・(4)

と大別する方が内容的により相応しい。「政治的な危機に陥っている、しかも『まめ』でない光源氏に対して、別の男のもとに去って行く女と、それでもなお慕い続ける女という、対称的な構成(注4)」によって本巻は形成されているといえよう。

三

「花散里」という巻名は、既に光源氏の衰運を暗示していて暗澹たるものがある。

木船重昭氏によれば、本巻冒頭「人知れぬ御心づからのもの思はしきは何時となきことなめれど」の部分は、「五・七音節句、その字余りの八音節句、都合五句、頭・脚韻に配意した律調文(注5)」のことである。

さて、光源氏が花散里のもとを訪れるべく出発したのは「五月雨の空めづらしく晴れたる雲間」を利用してであった。「めづらしく晴れたる雲間」の短さに相応しく、光源氏と花散里の対面も僅かの時間であった。

物語は、

御妹の三の君、内裏わたりにてはかなうほのめきたまひしなごりの、例の御心なれば、さすがに忘れもはてたまはず、わざと(注6)もてなしたまはぬに、人の御心をのみ尽くしはてたまふべか

めるをも、(注7)このごろ残ることなく思し乱るる世のあはれのくさ(注8)はひには思ひ出でたまふには、

と語っていて、(A)によれば既に内裏あたりで二人の関係は始まったものの、光源氏の扱いは(B)「わざとももてな」さず、三の君は煩悶のうちに日を送ったが、(C)「このごろの残ることなく思し乱るる世のあはれのくさはひ」として光源氏は花散里を思い出したという。今、仮りに(C)「思し乱るる世のあはれ」がなかった時、光源氏の足は三の君のもとへ向ったか否か。それは物語の語るところではないが、読者側からの予想としては、光源氏は「さすがに忘れもはてたまはず」、一方「わざとももてなしたまはぬ」扱いをした筈。とすると、三の君の煩悶は読者の想像以上のものであったことになる。つまり、光源氏を三の君のもとへ向させたのは、他ならぬ「思し乱るる世のあはれ」があり、かかる光源氏の現状の中にこそ浮上する女性だったことになる。しかし、それも五月雨の僅かの晴間に相当する女性であった。

いよいよ三の君のもとへと出発し中川のあたりを進む時、よく鳴り響く琴の調べに耳とまり、牛車から乗り出して邸内を覗いた光源氏は「ただ一目見たまひし宿」と見た。それは「大きな桂の樹の追風に祭のころ思し出でられ、どこことなく風情を感じたからであった。まず、琴の音色に始まって薫風へと受けられる。そこに郭公の鳴声が聞えて来る。彼は惟光を邸内に入れて消息を伝えさせる。

をち返りえぞ忍ばれぬほとときすほの語らひし宿の垣根にと贈れば、中川の女は

ほととぎす言問ふ声はそれなれどあなおぼつかな五月雨の空
と返歌した。惟光は「よしよし、植ゑし垣根も」と言うと女の邸を
出て行ってしまった。

花散りし庭の梢も茂りあひて植ゑし垣根もえこそ見わかぬ
を引歌として『紫明抄』が挙げるところである。

中川の女には光源氏との関係を、今は「さもつつむべきこと」が
あるらしいと惟光は見た。『細流抄』が注記するごとく「此ほど久
しく問ひ給はざりし故に、もしことかたに心ひく」のかも知れな
い。となると、惟光は引下がらざるを得なかった。

ここで光源氏は「かやうの際に、筑紫の五節がらうたげなりしは
や」と五節を想起する。須磨巻に「まして五節の君は、細手ひき過
ぐるも口惜しきに……」と語られる女性であるが、物語には光源氏
と五節との関係について詳細な記述が見えない。いふなれば五節も
中川の女も、ともに行きずりの相手にすぎない。「かやうの際」の
女としては、中川の女に比して五節の方に「らうたげ」さを認める
のが光源氏であった。

物語は中川の女との歌の贈答の段の結末を

いかなるにつけても、御心の暇なく苦しげなり。年月を経て
も、なほかやうに、見しあたり情過ぐしたまはぬにしも、なか
なかあまたの人のもの思ひぐさなり。

と閉じる。光源氏は「いかなるにつけても」心の休まる時なく、常
に悩み続けているという。これが彼の本性なのである。これをこそ
「色好み」という呼称が相応しい。たとえ年月過ぎようとも「見し

あたり情過ぐしたまはぬ」故に、女性も煩悶すれば男性も苦悩する
のである。

そういう人（「行きずりの相手」のこと——筆者注）を、源氏
は忘れない、というよりもそれぞれの女の印象が源氏の胸の中
に残るのである。^(注6)

との評が見えるが、光源氏はそのような男なのである。

四

「かの本意の所」は想像通り人目もなく寂寞としている。

光源氏はまず麗景殿女御の方で桐壺帝在位中の思い出を語りあ
う。そのうちに夜も深更に及んだ。折から五月二十日の月が出る。

近くの橋の香が漂う。女御の様子は「ねびにたれど、飽くまで用意
あり、あてにらうたげなり」と物語は語る。この場に相応しいこ
うした女御の様子は王朝物語文学の真髄であろう。

女御と桐壺帝との仲は「すぐれてはなやかなる御おぼえこそなか
りしかど、睦まじうなつかしき方」に帝は思っていた。軒端近くの
橋の香はこうした桐壺院在世中を懐古させ、光源氏に懐旧の涙を流
させた。女御の前でこそ今の光源氏は誰に憚ることなく涙を流すこ
とが許されるのであった。

折から郭公が鳴く。中川の女の邸と同じ声で鳴くので、自分のあ
とを慕って来たのかとふと光源氏は思う。村井利彦氏が

中川の宿のほととぎすが、橋を求めて花散里の世界にゆく、こ

れが、光源氏の心理をほとゞぎすによって描いてみせた技法で
あることは明白である。^(注7)
と述べられたごとくである。

光源氏は『古今六帖』の歌

古へのこと語らへばほとゞぎすいかに知りてか古声のする

と口遊び、女御に

橘の香をなつかしみほとゞぎす花散る里をたづねてぞとふ

と詠じた。巻名の由来は光源氏が詠じたこの歌による。

五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする。〔古今〕巻

三・読人知らず)

を踏まえて詠じられ、かつ「花散る里」という語は、

橘の花散る里のほとゞぎす片恋ひしつゝ 鳴く日しぞ多き〔万

葉〕巻八・大伴旅人)

橘の花散る里のほとゞぎす語らひしつゝ 鳴かぬ日もなし〔続

古今〕巻三・大納言旅人)

などの歌による。

女御は

人目なく荒れたる宿はたちばなの花こそ軒のつまとなりけれ

と返した。桐壺帝の後宮ではさほどの時めきは見えなかったが、や

はり女御は並々の女性ではなかったと光源氏は確認を新たにされた

であった。

さて、三の君を花散里と呼称することに關して、

(1) 巻の名は花散里となっているが、それは源氏が女御と詠み交

した歌の文句により、本来は三の君と關係はない。それで三の
君を花散里と呼ぶのもおかしいともいえる。^(注8)

(2) 花散里と呼ばれるにふさわしい女性は、女御であり、その巻
に出てくる「女君」の意で妹君を呼んだと解するのは如何なも
のであろう。^(注9)

(3) 元來、花散里というのは、麗景殿の女御の住いを指した名称
であって、麗景殿の女御の御妹の三君——後に作者自身によつ
て花散里と呼ばれた——を指したものではなかった。勿論、住
いや、住んでいる場所をもって、そこに住む特定の個人を呼ん
だ例は珍しくないが、その意味では、花散里とは女御の御妹の
三君をいうより、むしろ麗景殿の女御その人を呼んだものによ
うである。^(注10)

などの疑問・異論が見える。確かにその通りであって、作者は花散
里巻ではそれほどの顕著な活躍をする女性として、女御の妹三の君
を造型していなかったのではなからうか。物語の進展に伴って「花
散里」が麗景殿女御から女御の妹三の君へと移行していったものと
思われる。物語が長篇化への道を辿るにつれて、三の君もそれに相
応しい登場人物として成長していったのであろう。

五

光源氏は「御妹の三の君、内裏わたりにてはかなうほのめきたま
ひしなごり」があつて、近頃の沈淪生活からふと彼女を思い出し、

「忍びがたくて、五月雨の空めづらしく晴れたる雲間」に彼女のも
とへ赴いた。そして、物語はやっと三の君と対面する場に至る。こ
の段について

この女君との場面は驚くべきほどにきわめてかすかな描かれか
たである。この女君を訪れる構想の意図はどこにあったのかと
あやしまれるくらいである。この女君との場面は何ほどの具体
性もない。その姉、麗景殿女御との懐旧の場面こそクライマッ
クスとなっていて、作者は力をそそいでいる。(注五)

と玉上琢弥氏が述べられるごとく、全く意外な物語展開となってい
る。

花散里巻は

仮にも、見たまふかぎりは、おし並べての際にはあらず、さま
ざまにつけて、言ふかひなしと思はるるはなければにや、憎げ
なく、我も人も情をかはしつづ過ぐしたまふなりけり。それを
あいなしと思ふ人は、とにかく変るもことわりの世の性、と思
ひなしたまふ。ありつる垣根も、さやうにてありさま変りにた
るあたりなりけり。

と結ばれる。中川の女・麗景殿女御・妹三の君と語り継がれて来た
本巻が、なぜ「ありつる垣根」つまり中川の女をもって閉じられて
いるのであろうか。ここで再度本巻の構成を考えてみよう。女性を
中心にしてみると、

中川の女との歌の贈答

麗景殿女御との歌の贈答

三の君との対面

となっていて、光源氏との愛情関係にあったのは中川の女・三の君
であって、麗景殿女御は三の君に到る橋渡しの女性である。では、
中川の女・三の君の両女性を比較すると、前者は光源氏の愛を受け
たが、今は「……あなおほつかぬ五月雨の空」と返歌する状態にな
っていて、「さもつづむべきことぞかし」という有様である。対す
る三の君は光源氏の来訪「めづらし」いものの、「世に目馴れぬ御
さまなれば、つらさも忘れ」てしまおうと語る。つまり、三の君は光
源氏が「さすがに忘れもはてたまはず、わざとももてなしたまは
ぬ」ので、「心をのみ尽くしはてたまふ」ようでありながら、光源
氏を忘れ去ることが出来なく、ゆえに彼から離反することなく煩悶
のうちに待つ女性であった。こうしてみると、中川の女・三の君は
鮮かな対称的人物といえる。だが、作者は中川の女を描こうとい
うのが目的ではなかった。

年月を経ても、なほかやうに、見しあたり情過ぐしたまはぬ
という光源氏の態度こそが中心であった。だから、三の君のような
女性こそが光源氏の好む女性であり、彼はそうした女性を求め続け
たのである。

作者は三の君のごとき女性を求める光源氏を描きながら、花散里
巻では麗景殿女御との懐旧の場面に力を注いでいた。それは「五月
雨」「郭公」「橘のかをり」という、とりわけ懐旧の情を掻立てる季
節の風物によって和歌的情趣を横溢させ、父桐壺院崩御後の今時点
における「昔の御物語などを聞えたまふ」相手としては、麗景殿女

御がより相応しい女性だったからである。ゆえに、作者は女御との対面の場を他と比べてより詳細に語ったのであった。

花散里巻に登場する三人の女性（中川の女・麗景殿女御・三の君）に、光源氏の念頭を掠めた女性「筑紫の五節」を加えた四人の女性は、いずれも本巻が初出の女性である。しかも、四人ともに過去に光源氏と何らかの関わりがあったと語る。中川の女は「ただ一目見たまひし」であり、筑紫の五節は「……うつつたげなりしはや」とまづ思し出」で、麗景殿女御は「院崩れさせたまひて後、いよいよあはれる御ありさまを、ただこの大将殿の御心にもて隠されて、過ぐしたまふ」らしいと語る。そして三の君は「内裏わたりにはかなうほのめきたまひし」方であったという。

懐古の情で統一する中に、過去に関わりのあった女性達を点綴し、現時の光源氏の状況を合致させた、とりわけ見事な一巻であったといえよう。それがとりもなおさず花散里巻なのである。重松信弘氏は

長編物語の一部として考えるならば、賢木の巻の暗さと緊張とをほぐして、しばらく中休みして、気分をなごやかにするといふ意味が考えられる。^(注12)

と述べられた。しかし、花散里巻の重みはただほんの一夜と思われる短時間の光源氏の行状を語る中で、見事な和歌的情趣に支えられた王朝絵巻をくりひろげているところからも窺えよう。とりわけ、「よく鳴る琴」の音・「郭公鳴きて渡る」その声など、聴覚による演出がなされ、加えて「大きな桂の樹の追風」・「近き橘のかをり」

と触覚と嗅覚まで援用して王朝的情緒の盛り上げをなしている。こうしたところに、さすがに王朝物語文学であると首肯させる要因がある。

六

光源氏は今、懐古にふける状況にある。賢木巻末の政治的事件となるであろう大后の思惑の中で、桐壺院在世中を懐しむのは至極当然の成り行きであろう。

『源氏物語』全篇において篝火巻に次いで短い花散里巻には、描かれざるを得ない主人公光源氏の心情があったのである。彼の心を十分に理解してくれる女性がいて、そこを訪ねて懐旧の涙を流すことが、現時の光源氏にはより相応しく、『源氏物語』全篇、とりわけ葵・賢木・須磨・明石と続く巻々の中で特に必要とされたのであった。その巻は長大で冗漫に陥ってはならない。短く、しかもきりりと締っていないなくてはならない。それが本巻花散里なのである。

巻名「花散里」とは見事な巻名である。現時点における光源氏の場合を象徴的に示した巻名であって、読者は華麗に咲き続けた花が今こそ散り過ぎて行く、そうした場面を脳裡に描くに違いない。清水好子氏が「この巻はまず巻名から先にあったのではないかとさえ私は思う」^(注13)と述べられたが、室伏信助氏が「逆境にある光源氏が『花散る里をたづねてぞ訪ふ』という発想をごく自然にみちびくものとして説得力がある」^(注14)と評されたのは正鵠を得たものである。

妹三の君が物語進展に伴って「花散里」と呼称され、挙句は六条院にて暮らす女性となつて行つた。その彼女が賜つた邸は夏であつた。

六条院で春の邸を賜つたのは紫の上であつた。若紫巻で登場する彼女に最も相応しい。北山の庵室にて雀の子を追つていた彼女は、後年夕霧の垣間見では「気高くきよらに、さとはほふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき榊桜の咲き乱れたるを見る心地す」と語られて、春こそが彼女の季節である。秋好中宮と呼ばれた前齋宮は、賢木巻の野の宮での光源氏と母六条御息所との別れの場を終えた後、いささかながら登場する。つまり、「齋宮は、若き御心地に、不定なりつる御出立の、かく定まりゆくと、うれしとのみ思したり」と語られ、以後は伊勢齋宮への群行と物語は続いている、齋宮は母御息所とともに登場した。これは光源氏二十三歳の九月十六日のことであつた。晩秋の登場が前齋宮である。冬は明石の上が賜つた。彼女は若紫巻で良清の噂話の中で登場した。「かの国の前の守、新発意のむすめかしづきたる家、いといたしかし」に始まつて、その容貌などは「けしうはあらず」とも語っていた。時あたかも春であつた。また、明石にあつて入道が光源氏に彼女のことを語つたのは、四月の夜も更けて「浜風涼しうて、月も入り方になるままだに登みまき」つた頃であつた。続けて光源氏は入道の娘に文をやり、八月十三夜に光源氏は入道の娘を訪ねたのであつた。このように辿ってみると、明石の上を冬に該当させる要因がない。私は「冬になりゆくままだに、……」と語り出される薄雲巻における、大堰の

山荘の母子の別れの場をもつてその要因と考える。

そして、夏は花散里であるが、私はこの花散里巻における物語への登場をその機縁とする。「五月雨の空めづらしく晴れたる雲間に光源氏が「渡る」人であっても、当時光源氏が「渡る」相手ではない。「桂の樹」「橋」「郭公」という、夏の景物を背景に、ひそやかに「源氏物語」の中で生き続けるのが花散里という女性なのである。やはり彼女にとっては夏こそがより相応しい季節であつた。しかも、猛暑のそれではない。初夏の「五月雨」の「晴れたる雲間」こそが彼女に似つかわしいのである。

なお、明石の上の六条院における邸の賜り方に関しては、稿を改めて考察する予定である。

(注1) 本文引用は『日本古典文学全集』(小学館)による。

(注2) 室伏信助氏「花散里」国文学(学燈社)第19巻第10号、

昭和49年9月号(五六頁)。

(注3) 『物語文学の方法II』(二一〇頁)。

(注4) 注3参照(二〇八頁)。

(注5) 木船氏は「ひとしれぬ(5)／みこころづからの(8)／ものおもはしきは(8)／いつとなきこと(7)／なんめれど(5)」と、その文構成を分析された。なお、同氏は「し(7)びがたくて(7)／五月雨の(5)／空めづらしく(7)／晴れたる雲間に(8)／渡り給ふ(6)」も同様に分析された。

〔「源氏物語」花散里の巻の表現と方法〕南波浩編『王朝物語とその周辺』・一一八頁。

- (注6) 『日本古典文学全集』第二(二四八頁)。
(注7) 『花散里の位置』平安文学研究第41輯昭和四十三年十二月(六九頁)。
(注8) 重松信弘氏『源氏物語の構想と鑑賞』(二二五頁)。
(注9) 岩下光雄氏「葵・賢木・花散里」『源氏物語講座』第三卷(有精堂・一〇八頁)。
(注10) 藤村潔氏『源氏物語の構造』(三八五頁)。
(注11) 『源氏物語評釈』第二卷(六四四頁)。
(注12) 注8参照(二二五頁)。
(注13) 『源氏物語事典』下(二五七頁)。
(注14) 注2参照(五六頁)。